

第1回アイヌ施策推進検討会 会議録

1 開催日時

令和6年6月26日（水）午後6時～午後8時15分

2 開催場所

旭川市民生活館 2階講堂（旭川市緑町15丁目）

3 出席者 ※敬称略，五十音順

（1）参加者

大野 剛志，川村 久恵，坪坂 ルミエ，本間 愛之，森田 直，矢三 尚

（2）事務局

社会教育部文化振興課 坂本課長，友田補佐，山腋補佐，小川主査

（3）オブザーバー

地域振興部 板谷次長，佐瀬次長

福祉保険部 鈴木次長

観光スポーツ部観光課 白木課長，森

社会教育部旭川市博物館 矢萩館長

4 会議の公開・非公開

公開

6 傍聴者

6名

7 議題

（1）上川アイヌの歴史とこれまでの施策の進捗状況について

（2）令和7年度以降の取組に関する意見交換

（3）今後のスケジュールについて

8 発言内容

次第4「アイヌ政策推進交付金について」及び次第5「上川アイヌの歴史とこれまでの施策の進捗状況について」に関する発言

□事務局

別紙1～5を基に概要を説明

■参加者

次年度(令和7年度)の地域計画のKPIを立てるときに、定量的な数値が基本だとは思いますが、達成率が低くなっているのが現状だ。また、定量的な数値については、年々拡大していかなければならないというイメージがある。目標によっては、維持でも良いものもあると思うので、「満足度がある」など、定性的な評価指標も設定した方が、無理なく継続できると思う。国から求められている指標はどこまで出さなくてはいけないのか。

また、地域計画の中の各事業は、複数の課が所管しているが、どの部局が束ねていくのかお聞きしたい。

□事務局

まず数値目標について、御指摘のとおり現行計画は、コロナ禍の影響もあり、なかなか思うような達成状況ではない。これは、旭川に限らず、他の自治体も同じような状況ではあり、国も承知している。来年度以降、新しい計画の中で、どのような目標を定めていくのか国とも協議していくこととなるが、おそらく定量的な数値を求められてくるとは思う。どういった数値目標が良いのかは改めて検討しなければならない。

次に、束ねていく部署ついて、各課がアイヌ関係の具体的な事業案を検討し、それらを文化振興課で取りまとめ、本市の窓口として国とも協議しながら、5年間の地域計画と各年度の事業計画を策定していくということとなる。

■参加者

地域計画には文化振興、地域振興、地域コミュニティ振興の三つの柱があると思うが、予算配分をバランスよく設定すべきなのか、力を入れるべきところに傾斜をかけて重点的に取り組むことも可能なのか、お聞きしたい。

□事務局

三つの柱毎にバランスを取らなければならないという制限は特にはない。

■参加者

ということは、これまでやってきた計画の達成状況を参考としながら、力を入れていくべき取組を検討し、新たな目標を検討していくということで良いか。

□事務局

その通りだ。

■参加者

目標数値について、令和5年度の観光入込客数が473万人ということだが、これだけ旭川に来ているにも関わらず、博物館への入館者数が2万6千人程度に留まっていることが課題だ。目標がうんぬんというよりも、観光客にいかにも博物館やアイヌ記念館に来てもらうかということが重要だ。必ずしも達成できたとか、できなかったというよりも、観光客に博物館や川村カ子トアイヌ記念館の情報が行き渡るような仕組みが必要かと思う。また、今年は、インバウンドを見込み多言語化する事業が様々あるが、そういったものを活用して、観光客の宿泊する各ホテル等にも情報を行き渡らせ、ホテル担当者等の観光のキーパーソンとなる人が、こういった所に行ったら、こういうものが見られますよ、ということを把握しているようになってほしいと思う。

ひとつ聞きたいが、観光課の令和6年度事業予定の中で、「アイヌ文化観光モデルコースのスポットで、伝説の地である神居古潭の観光案内看板の建替え、散策しやすくなるようにWebマップを制作する」とあるが、神居古潭のアイヌ関連の伝説の場所を実際に行くのが難しい場所にある。仮にマップを作成しても、「それは何処なの?」ということになってしまう。多くの観光客に足を運んでももらうためには、マップや看板をつくるよりも、実際に行けるようにガイドをつける方が良いと思う。

□事務局

ガイドの育成について、現行計画では未着手となっている。未着手事業について、次期の計画案でどうするのか考えていきたい。

■参加者

これまで観光課でモニターツアー、モデルコースのマップを作成しているが、こういったものの評価というか、これを利用してどのくらい効果があったのかを示せる数値は出せないのか。

□オブザーバー

冊子の配布数等はあるが、その先の効果を示す数値はない。どのように数値化していくかということは課題だ。

■参加者

どうしても神居古潭等の観光スポット的なところの紹介になるかと思うが、私たちが紹介したいものも盛り込んでほしい。

□オブザーバー

以前にアイヌ協議会の協力で神居古潭の観光客に紙芝居でお話していただいたことがあり、理解が深まったということはあった。

■参加者

紙芝居を行ったのは市外在住の方だ。旭川のアイヌ団体のメンバーもそれぞれ仕事をしており、負担も大きいところだが、人材育成をして、今後は地元で対応できるように考えていければ良いと思う。「こたんまつり」に関しても、神居古潭の地域の高齢化に伴い、廃止になったと思う。

ただ、「こたんまつり」については、60年以上の歴史があり、アイヌ団体のメンバーで続けていきたいからということで、去年再開し、今年も実施予定となっている。今後は、もう少し内容を膨らませて実施していけたら良いかと思っている。

次第6「令和7年度以降の取組に関する意見交換」に関する発言

■参加者

いくつか柱があって、地域計画でも一番根本のところに「西蝦夷文化」というキーワードがある。これまで着手できていないが、例えば聞き取り調査をするというのはどうか。誰が調査を行うかという点当然アイヌのメンバーだ。聞き取りの相手はアイヌの年長者であったり、例えば元博物館の館長のような周辺にいた人、アイヌの上の世代の人たちと交流があった人となる。そういった人に話を聞くことを通し、これまで私たちの手元になかった様々な資料があれば入手する。例えば、昭和30年代くらいの古い時代のアイヌが嵐山で丸木舟を作る様子を映した数分間のニュース映像が存在するが、私たちの手元にはない。もっと長く撮ったものがあればさらに良いが、少しずつでもそういったものを集めてくることができたら良いと思う。

それから自然素材となる北海道の植物などの調査・研究や育成ができれば良いかなと思う。もともとアイヌが何かの物を作るための素材は自然の中から得なければならなかった。それが現在は簡単に入手できないような状況にあるけれども、そういったものがどこにあるのか、どういった環境で育っているのかも含めて、調査・研究をし、また入手をし、育成ができれば良い。そのためには市有林・道有林・国有林などの活用も視野に入れられたら良い。なおかつ森を作っていけたら一番良いと思っている。

他地域では「イオルの森」といって、平取町だとか、今年は千歳市も着手するようなので、そちらが必ずしもうまくいくとは限らないが、視察とか、情報入手をしたい。一回旭川市内の河川敷でやっているのを見に行ったが、必ずしもうまくいっているような状況ではなかった。成長はしているけれども、私たちが求めている素材ではないかなと思ったものもあった。

□事務局

育成というのは、材料となる植物などを育てる、栽培するということか。

■参加者

そうだ。山に行けば様々なものがあるが、必ずしも必要なものが必要な量だけあるとは限らない。例えば、水生植物のガマは、もともとこの辺りの川のほとりにあったと思うが、今の状態だとなかなか良い物を見つけるのは大変だ。そのほか、食材になるものなど色々な材料調達が必要だが、道有林などは勝手に入れない。

このような状況で、例えば林の活用であれば、私たちだけの力だけではなかなか難しいので、道立北の森づくり専門学院の人達や、嵐山の人達とか、そういった方たちの力も借りられたら良いかと思う。

□事務局

アイヌ新法で、国有林を使用できる規定がある。各市町村のアイヌの方の間で継承されてきた儀式や文化の振興のために、国有林内の林産物を採取したり、種を植えたり、調査したりできる仕組みができています。具体的にどのように使っていくかは地域を所管する営林署と協議し、市と営林署の契約で定めることとなる。

市有林については、担当部署に確認したところ、ルールや先例がないため林産物を使用するのであれば、個別の検討が必要となる。まずは、仕組みが作られている国有林の活用を考えていくものかと思う。

■参加者

どこに何が生えているかわからない。一度地図をもらったことはあるが、それをもとに、実際に行ってみないと、やみくもに行っても効率が悪い。

国有林はある程度、自由度を高くして使わせてもらわないと、一回一回申請書を書いて、いついつ行きますというのは大変だ。

□事務局

現地調査の上で、どこを使わせてくださいと申請していく必要があるだろう。他の自治体の先例を参考としながら進めていくべきだろう。

□事務局

国有林の活用にあたっては、あらかじめ5年契約で使用する場所、採取する植物の種類、量などを定めておくこととなる。その上で、契約の範囲で自由に使えるということになるようだ。

■参加者

イベント関係について、昔、アイヌ語教室が存在した時代に、旭川アイヌ文化フェスティバルというものを何回か生活館でやっている。生活館で今年も10月に展示会があるが、数年に一回でも館内全体で講演会とか、料理とか、展示もあったり、舞踊もやったり、フェスティバルみたいなことができないかと思う。

それと、デザインウィークがあるがアイヌが関わっていない。例えば、デザインウィークの開催中に川村カ子トアイヌ記念館で、いま現在作っている人の物とか、年長者の展示とか、いつもは展示していないものを展示して、連携することができないかと思う。

あとは、旭川冬まつりだが、もともと、真冬に行うイヨマンテというアイヌの儀式が前身にあるとインターネットに書かれている。そのとおり、第2回くらいの写真に、ステージ上に子熊を連れて行って舞踊をするという写真がある。今の冬まつりは、アイヌが出演していない状況だが、河川敷のステージはともかく、常磐公園で特設会場として、テントを設置して温かい料理を出したり、照明をカッコよく当てて舞踊したり、雪像で木彫り熊を作ってみたりと色々できないかと思う。

あと、買物公園でも何か夏にできないだろうか。8月9日は「世界の先住民の国際デー」なので、その頃に旭川市民に旭川アイヌの存在を感じてもらうために古式舞踊のイベントができて良いのではないか。ものづくりに関連して、ムックルをアイヌ音楽会でも使用しているが、なかなか入手しづらいものになってきているため、地元で作れないかと思ってる。旭川にある様々な産業と結び付いて、何かできないか。そういった時には、例えば旭川大学の経済学部の方たちと商品開発ができないかなとも考えている。

あと、小冊子のところだが、アイヌ民族文化財団で発行している『アイヌ民族～歴史と文化』という小冊子があるが、これの旭川版みたいなものを作りたい。今回の検討会資料の別紙3にも上川アイヌ略史があるが、不十分なところもあるので、旭川市史を基にして、日本語版と英語版の冊子を作れたら良いと思う。

あと、昔、神居古潭等でエコツアーみたいなものをやっていたが、そういうものも良いのではないか。ガイドを育成していくとは、どういうことをするのか分からないが、アイヌの中でそれができると一番良い。一方で、ガイドの仕事はガイド独特のノウハウがあり、すごく難しいところだ。

□事務局

質問だが、提案のあった資料の収集と高齢者への聞き取り調査について、他の自治体で

は歴史資料の高解像度の写真化、デジタルアーカイブ化や高齢者を交えた座談会のようなイベントチックにした調査等を実施している事例が見受けられる。資料をひとつひとつ入手するとなると保管や維持管理の問題も出てくる。提案いただいた内容は、デジタルデータや文書にまとめる形で収集・保管するという形で代替できるか。

■参加者

デジタル化していくのも良いのではないかと。ただ、博物館にある資料などは私たちにとって非常に重要な財産で、この扱いは今後も含めて慎重に行ってもらいたい。もちろんプライバシーということもあるが、それだけではなく旭川でやるからこそ、私たちにとってより価値がある。いろいろな話が他所から来たりして、失敗してたりする。何故かというところ、他所から学者を入れて、その研究を進めていく段階で、資料の全部が別のところに移動してしまう。私たちの力不足でできていないけれど、他所に頼るのではなく、特に音声資料なんかは、旭川のなかで聞き取りをしていくのがベストだ。数年前はできる状態だったが、できる人が亡くなり、今はできない状態だ。今後も希望は捨てずにやっていきたいと思っており、とにかく旭川に残すこと、旭川から流失してしまった資料を何らかの形で入手することが大切だ。

ある方の遺品は国立の博物館に寄贈されてしまっているが、そこで撮られている音声にしても写真にしても、それを公開する時には、遺族の許可が絶対必要となる。国立博物館は、黙って公開することは絶対ないので、そのような時にデータを入手していくことが必要ではないか。博物館関係の資料の取扱いについては、色々なことがあっても動じないでもらいたい。随時、アイヌ関係者に相談してほしい。

■参加者

資料収集する際に、アイヌの方々が自分たちで話を聞いていくことを事業化して、事業費を支払い、仕事としていくことは可能なのか。仕事にしていくということは、アイヌ文化を継承する上で、とても大切なことだと思う。

□事務局

作業に対して謝礼を支払うことは可能だ。団体への調査委託という形もとれる。

■参加者

委託でも良いけれど、ある程度まとまったものでないと仕事にはならない。謝礼にしても、時給に換算して2時間でいくくらだとすると、なかなか難しいと思う。やらなければいけないことだとは思っているため、聞き取りをして、それをどうにかしていくのも、大きな事業になっていくと良いとは思っている。

先ほど言っていた座談会形式について、一般公開ではないほうが良い。一般公開するの

は、また別のことだと思う。一人で単独で聴くよりも、複数いたほうが昔話ができるので、座談会的にするのは良いと思うが、一般公開になってしまうと、話しづらくなって、本音が出づらくなる。話される内容が大事だし、プライバシーに関わってくることも出てくる。

この辺りの様子だって数十年前は全然違ったはずだが、どんどん分からなくなっていくから、なにげない写真資料だと思っていても、すごく参考になるものもあるかもしれない。例えば50年前の写真とか、アイヌが映っていないなくても、あったら良い。

■参加者

アイヌの方々が求めていることに対し、どれだけ我々がそれを実現できるかということが重要だ。私としては聞き取り調査をしたいが、なかなかそういう方がいなくなっている。

■参加者

聞き取りできる方が少ないかもしれないが、だからこそ大急ぎでやったほうが良いと思う。

これとは全然違う話だが、熊に関して、今、ヒグマの目撃情報が増えているなかで、昔、春熊猟というのがあったと思うが、それがもし今後復活するようなことがあったら、一緒にアイヌの儀式ができれば良いと思う。それはすごく慎重にやらなければならないことで、そのための学びもしなければいけない。

■参加者

私からは、これといった提案や要望はない。私の母親は旭川に残っているアイヌの最高年齢だ。

■参加者

そういう人が語る夢や希望があったら、是非聞きたい。本当に時間が限られている。

□事務局

この交付金もいつまで続くか分からない。国の予算次第だ。基金も活用しながらやっていけると思う。

■参加者

今回のテーマは、来年度の計画を作るための意見出しということだが、思っていたより色々な施策を実施しているのだなというのが正直な感想だ。

今、長野県のとあるスキー場で、夏場に色々なことをやっていて、非常にお客さんが来ている。そこで何をやってるのかということ、結局新しいものを次々にやるというよりは、

手の届く小さいものから継続性をもってやっているようだ。旭川の施策の進捗状況を試みると、未着手のものもあるが、0と1の差は非常に大きい。考えて何もやらないよりは、進展がなくても継続性がある方が3年、4年経つと、だんだんトライアンドエラーで良くなっていくと思う。全く新しいものを生み出すのはすごく難しいため、これだけやっているのであれば、基本は継続してやりつつ、未着手のものを組み合わせて新たな取組を考えていくということかと思う。

ガイドの育成は重要だが、すごく難しい。人に説明するのに、どこまで自信をもってしゃべれるか。知識だとか、経験、伝え方だとか含めて、高い技術が求められる。大雪カムイミントラDMOでも観光を通じた街づくりを目指していくなかで、ガイドの育成講座をやろうとはしているが、すぐに育成できるというものではない。

それを踏まえつつも、去年、DMOでアドベンチャートラベルというものをやっていて、初日に神居古潭、嵐山のハイキングと川村カ子トアイヌ記念館の見学ツアーを行った。外国人が14名ほど参加したが、直接色々な説明をしていただいたことについて、評価が高かった。ここでしか聞けない話が聞けたということで高い評価を頂いたと報告書にある。

「アイヌ記念館の特別開館」(別紙4の11ページ)に、夜間開館や外国人向け文化体験プログラムとあるが、周りの迷惑を考えるとなかなか難しいとか、ガイドの育成がなかなか困難だとか、個別に色々課題があると思う。難しいとは思いますが、例えば川村会長だったり館長が、夜間この日だけやりますとなったら、これで付加価値が付いて、これで観光ツアーの受入等もできるのかなと考えたりもした。

■参加者

夜間開館に関しては舞踊もできたらなと思っている。いつもは古式舞踊をただ説明して踊るのだが、アイヌの歴史とか文化とかが分かるような演劇仕立てでストーリーを伝え、そこに古式舞踊も入ってくるというようなものがつくれないかと思っている。演劇をやっている人に色々教えてもらいたい。照明などの技術的なことに関してもね。

昔、小熊秀雄賞の関係で朗読を頼まれたことがあって、そのとき、実施団体の方に指導を受けたことがあるが、すごく勉強になっておもしろかった。そういう体験が共有できたら、おもしろい演劇ができるかなと思っている。

最初は大人数の来客がなくても良い。実際473万人のお客さんが旭川に来ているわけだから、その中で夜にサンロクに行く人もたくさんいるかもしれない、お金を落としてくれる人がたくさんいるかもしれない。親子連れがサンロクでないところもと思う人もいるかもしれない。そういう人向けにできないかなと思っている。ホテルで部屋だけじゃ、食事するだけじゃ、と思う人向けにできればと思っている。

■参加者

演劇関係では旭川演遊会という団体がある。旭川の人たちとコラボするというのが大

事ではないか。

□事務局

観光客を惹きつけるとなると「食」が重要だと思うが、夜間開館の際にアイヌ食を提供することも考えてはどうか。他の自治体で、学校にレシピ提供をして、ふるさと給食という呼称で学校でアイヌ食を出している事例もある。

□事務局

アイヌの方が直接作るのか、飲食店等にレシピを提供するのか、食文化の普及に向けた手法はいくつかある。

■参加者

具体的にはまだこれからだが、食の提供については考えたい。

10年ぐらい前だが、近文小学校で、給食に鮭を出したことがある。アイヌと鮭の話をしてから、提供したということがあった。そういうこともできないことではない。

■参加者

先ほど話のあった8月9日の「世界の先住民の国際デー」に関して、旭川市独自で、「旭川アイヌデー」を条例などで定めて、この日にアイヌ文化の行事をしますよということを、テレビなどのメディアを通じて発信すると効果的ではないかと思う。

あと、以前にアイヌ文様のデザインを何かで取り入れようとしたときに、著作権などの問題で使えなかったことがあった。熊の横顔にアイヌ文様っぽいもの入れたデザインを作ろうとした時に、「まずいんじゃない？」となって、気軽に使えなかった。もちろん、デザインウィークは旭川で大々的にPRしてやるので、そこで旭川家具を作っている方とコラボすると宣伝効果が高いと思うが、権利関係がとても厳しく注意が必要だ。うっかり販売できない物を作ってしまったら、元も子もない。

■参加者

インターネットでフリー素材のアイヌ文様もあるが、使ってほしくない。旭川のアイヌの団体に相談してもらって、そこで一緒に作ってほしい。

話は変わるがひとつ提案がある。買物公園で、観光客が歩いていて、ここが何条通りか分からないということがあった。昔考えたアイデアだが、一条ごとに例えば川、鳥などの色々テーマを作って、そこで旭川アイヌが知れていくような仕掛けがあったら良いかなと思ったことがあった。ただ1条、2条、3条ではおもしろくないから、ここはナナカマド、ここは旭川の鳥というようなイメージ設定をすることをおして、アイヌの関わりとか、そういうことが情報として分かるようにするということだ。

■参加者

これまで様々な事業が計画化され実施されてきたと思うが、その中でも次期計画に向けた拡充要素の検討ということで考えたとき、ネットワーク化が必要となる。川村カ子ト記念館と市の博物館で何が違うかと考えたときに、記念館はそこでやっている体験型のサービスや説明が直接あって、生きたアイヌの生活・文化に触れられるのに対し、博物館はストックしている資料で歴史的なものを追うことができるというところ。それぞれの良いところを繋げていくことが必要だ。

アイヌ文化については、お亡くなりになる方が非常に多くなってきて難しいと思うので、教育と継承の部分で、旭川に生まれた子どもたちが、日常の学校教育のなかでアイヌ文化に触れていけるようにすることが必要ではないか。今いるアイヌの伝承を、例えばアイヌ記念館の新館長の川村晴道さんを中心に、若い人がどのように普及していきたいのかを考えて、そのなかで、やりたいことをプログラム化していくといったアプローチだ。

併せて、もう一つは観光として来てもらえる外部の人たち、特にハーバード大学の学生たちが、目を輝かせて川村久恵さんの話を聞いていたことがあった。ひょっとすると海外の方のほうが、アイヌ文化についてのシンパシーを感じると思う。今は円安で海外の人たちがかなり来ていると思うので、そういう人たちにウケるものは何かと考えたときに、旭川としてはこの事業をうまく活用して、アイヌの方たちの生活を豊かにしつつ、旭川の発信力を高めていくためのプロデュースをしていくという考えもある。滞在型観光で何ができるか、そう考えた時に、旭山動物園とアイヌ記念館のコラボがある。ヒグマ・エゾシカでアイヌの歴史を久恵さんに話してもらおうとか。うまく協働してルート化できるかがポイントだ。以前に川村カ子トアイヌ記念館開設100周年記念イベントの中で、アイヌの歴史と文化を辿るツアーを開催したときも、参加した方々の評価は高かった。そのときは滞在型ではなくて、日中に実施したのだが、夜泊まってやれるものはないかと考えなくてはならない。

実施している事業や計画に盛り込まれている事業を一つ一つチェックして行って、さらにできることは何かということをお次回までにみんなで宿題として考えて来てはどうか。ゴールとして何を目指していくかっていうのは、今日話ただけでも沢山出てきているので、柱建てが必要かなと感じた。その辺の戦略建てをしていかなければいけない。何をしたいのかをもっと整理して示す必要がある。

旭川市だけでできないことは、周辺の自治体とタイアップしても良いのではないかな。

■参加者

一番大事なところは、文化を伝承していくこと。それは学校教育とはちょっと違って、学校教育でアイヌのことを広げていくことも大事だが、アイヌ文化を継承していくことがとても大事だ。それが根底にあるからこそ、そこから色々なことができると思う。

■参加者

私は「アイヌ記念館友の会」といって、アイヌ記念館をバックアップする市民の会の事務局をやっているが、市民として、ガイドで勉強したレベルでできるものと、アイヌの方々ができるところは違うと思う。ガイド育成をどこまでバックアップするのか検討して、その辺の育成の方針を固めてもらわないと、人数が本当に減ってきてしまって、やりたいことが沢山あってもできないということがある。

■参加者

観光コンベンション協会の観光ボランティアとか、OMO7のガイドとかが観光案内するときに、先ほど話したような買物公園の区画毎のテーマ設定があったら旭川を知ってもらうのに良いのではないかと思う。アイヌ自身が考える内容だけではなく、旭川観光全体について分かってもらう一つの要素として旭川アイヌを紹介するといったようなガイド育成の方向性もあるのではないか。

■参加者

アイヌ文化の応援隊というか、アイヌ文化に興味を持っている市民と、市外の人とが繋がる機会がうまくこの事業で創出できれば、旭川がすごく盛り上がる。そこをゴールにしていくと良いのではないか。

会議資料(別紙3)の中にアイヌ文化が消費されている歴史もあると記載されているが、観光事業として仕事をつくっていくことも大切だ。そこのところでうまく折り合いがつけられれば良いと思う。

■参加者

アイヌが主体的に関わることができれば消費ではなくなる。そういう方向性が良いのではないか。

■参加者

先ほど、画像・映像という話があったが、アマチュア写真家の方がかなりの写真を撮っている。それが表に出ずに家の中で眠っているか、分散・廃棄されてしまっている。旭川には写真家のグループもあって、アイヌ、旭山動物園の写真をたくさん撮影しているアマチュア写真家の野原典雄さん、アイヌ語を伝承されてきた北風磯吉さんと交流を持っている市役所関係の表秀雄さんという方が写真を撮っていたと記憶している。作品の中には何気ない写真で、本人・家族にとっては価値のないものになっているものもあるかもしれない。そういうものがなくならないうちに集めておくことが重要だ。市から記録保存への協力を呼びかけた方が良いかもしれない。

□事務局

お借りして、複製するなどして記録に残していくのかということか。

■参加者

有償と言われたら、お金を払ってでも集めていくべきだ。それをどういう形で見せていくかは今後の課題だ。

□事務局

デザインウィークの話など、担当の部署がここにはない。関係部署とも協議をしながら地域計画の素案を検討し、次回の会議でお示しする予定だ。

次第7「今後のスケジュールについて」

□事務局

別紙6を基に説明

(参加者からの発言 なし)

以上